様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ５ 月 ２８ 日現在

機関番号：１７７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2018
課題番号：１５Ｋ０２９８４

研究課題名（和文）小規模島嶼部における先史・原史時代文化適応の考古学的研究

研究課題名（英文）Archaeological study of prehistoric and protohistoric cultural adaptation in the small-scale islands

研究代表者
新里　貴之（SHINZATO, Takayuki）

鹿児島大学・総合科学域共同学系・助教

研究者番号：４０３２５７５９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：　トカラ列島は考古学調査研究の空白地域であったため，分布調査を実施し，土器・陶磁器の分布状況から多くの空白期を埋め，九州系と南島系の土器文化圏の年代的な変動を明らかにした。また，中之島宮水流遺跡の発掘調査により初めて弥生時代及び平安時代の遺跡の存在を明らかにした。宝島大池遺跡の発掘調査では，露出した石棺墓が単層構造であることを確認し，縄文時代遺跡では大型動物の解体場所か廃棄場所と思われる場所の存在が明らかとなり，初の出土となる有孔貝刃も出土した。歴史時代では明治27年に平島に漂着した無人中国船の存在を文字記録から明らかにし，それがトカラ列島に流通する清朝磁器である可能性が高いことを指摘した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　各島の分布調査を行い，空白期の多かった先史～原史時代の土器文化について南北系統の土器分布圏が変動する実態を明らかにした。また，中之島宮水流遺跡発掘により弥生時代・平安時代の遺跡の存在を確認した。宝島大池遺跡発掘では縄文時代前期末～中期初頭には同地でもサンゴ礁環境が整い，それに依存した食性が明らかにされた。歴史時代では，明治27年に平島に漂着した無人中国船の記録を明らかにし，それがトカラ列島に濃密に分布する清朝磁器である可能性が高いことを突き止めた。本研究はトカラ列島初となる遺跡・遺構・遺物の存在を明らかにしたほか，歴史に埋もれた海難事故とその恩恵を受けた小規模島嶼部のあり方を浮き彫りにした。

研究成果の概要（英文）：　The research on the surface collection of various type of pottery and ceramic turns out to make up a chronological blank period from prehistory to protohistory in Tokara Islands and also reveals a chronological transition of culture between Kyushu and Southern islands. It is made known by the first excavation that there exist archaeological remains of Yayoi and Heian periods in Miyazura site on Nakanoshima Island. It is also confirmed that there is a single layer type of stone coffin that belongs to Yayoi period, and in the remains of Jomon period there are excavated a site of slaughter or disposal of large animals together with a knife of shell for the first time. It is designated by a chronological research that many blue and white china ceramics in the period of Qing Dynasty were possibly distributed in Tokara Islands based on the official documents, folk magazines and interview surveys which prove that an unmanned Chinese ship was drifted ashore to Tairajima Island in 1894.

研究分野：考古学

キーワード：トカラ列島　小規模島嶼部　先史時代　原史時代　歴史時代　宮水流遺跡　大池遺跡　清朝磁器

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究者はこれまでに，南西諸島のうち大隅諸島，奄美諸島，沖縄諸島，先島諸島の先史時代～原史時代の研究を実施してきた。これらは南西諸島の島々のなかでも核となる地域であり，島嶼ごとに年代学的研究を経てその文化の変動の把握を行い，それぞれを比較検討することができる地域である。ところが，渡瀬線という生物学的・自然地理学的特殊な環境を持ちながら，大隅諸島と奄美諸島の間に位置するトカラ列島は，先史～原史時代の空白期が最も多く実態が不明であるため，自然，鹿児島県以北の先史文化の通過地点や，南西諸島の先史文化の北限地域としての認識に留まることになっていた。

２．研究の目的

本研究は，トカラ列島において先史～原史時代の集団が文化的にどのように適応したか，考古学分野から迫るものである。トカラ列島は日本一長い村（十島村：約 130km・12 島構成）でありながら，総面積が約 101km^2 しかない小規模島嶼の集合体である。地理的に火山性の高島とサンゴ礁性の低島で構成され，生物学的にも悪石島と宝島間に渡瀬線という境界ラインを有している特殊な環境下にある。トカラ列島の島々に残された遺跡の考古学資料を基に，トカラ列島が主要島ごとに独立した文化背景を持つのか，各島の相互関係で成り立っていたのか，その実態を把握し，トカラ列島地域という南西諸島の考古学的文化多様性の一端を解明する。

３．研究の方法

トカラ列島という鹿児島県域の島嶼部情報の蓄積のある鹿児島大学を主体とし，各機関の専門分野の研究者を研究協力者として集結し，従来とは異なる総体的調査から，トカラ列島の先史～原史文化の特質を把握する。これまで調査・回収された遺物の悉皆調査，発掘調査で得られた土器の型式学的研究，土器胎土分析による岩石学的・理化学的分析，貝製品の系統研究，動物考古学研究（貝類・脊椎動物遺体）における食性と環境の復元を行う。発掘によって掘削された土壌は全て 4㎜ メッシュで篩掛けを行い，重要な土壌はウォーター・フローテーションを実施し，微細遺物の検出を行うことでこれまで得られなかった資料の抽出を狙う。

４．研究成果

（１）トカラ列島の先史～原史時代の研究史をまとめ，12 島中，口之島，中之島，諏訪之瀬島，臥蛇島，平島，悪石島，小宝島，宝島，横当島の 10 島を踏査し，ほぼ全ての島で遺物を確認することができた。しかし，小宝島・横当島の２島では先史～原史遺物は把握できなかった。

土製煮沸具から理解できる文化圏の範囲は，貝塚時代前２期後半（縄文時代前期末葉～中期前葉），貝塚前３期末（縄文中期末葉～後期初葉），貝塚前４期前半・後半（縄文後期中葉），貝塚前５期前半・後半（縄文後期後葉～晩期），貝塚時代後１期前半古段階（弥生時代中期～後期前半）において，分布範囲の拡大・縮小はあるものの，トカラ列島には概ね奄美系統の土器が分布するが，前４期後半の一部では，トカラ列島の中間域である諏訪瀬島・悪石島付近で，南九州系統と奄美系統の土器が対峙するように分布することが分かった。貝塚時代後１期前半新段階（弥生時代後期後半～古墳時代）においては，大隅諸島系統の土器が分布し始め，貝塚後２期（奈良・平安時代）にはトカラ列島全域に南九州系統の土師器甕が分布するようになるという，土器文化圏の動態を明らかにすることができた。

しかしながら，これまで南九州や南西諸島において構築されてきた土器編年のうち，欠落する土器型式の時期も未だ存在しており，これについては，厳しい自然環境（資源の枯渇・火山噴火）による人間活動の断続性であるのか，単に遺物が確認できていないだけなのか，今後の調査にゆだねることになった。

（２）トカラ列島中之島宮水流遺跡（地主神社敷地内）の発掘調査を実施し，トカラ列島初となる弥生時代，平安時代遺跡を確認することができた。遺跡は北東の後背部は急激な斜面，北西は水量豊富な宮川が流れ，南西部は海に面する標高 17m の狭い台地に位置する。

調査区からは，遺構を検出することはできなかったが，多量の遺物を得ることができた。貝塚時代前３期末（縄文時代中期末葉～後期初葉）と思われる土器，島外産と思われるチャート片，佐賀県腰岳産黒曜石などが得られた。貝塚時代後１期のうち弥生時代中期～後期の土器は最多の出土量であり，明らかに生活痕跡として認定可能である。石器として凹石が多く得られているが，有溝砥石，剥片石器，小型扁平片刃石斧，無茎の磨製石鏃やその製作工程で出る剥片が多量に得られている。弥生土器は少量の九州北部系（弥生前・中期），九州中部系（弥生中期），多量の九州南部系（弥生中・後期，古墳時代初頭），大隅諸島系（弥生中・後期），奄美系（弥生中期）など，多系統の土器が得られているが，主体となるのは弥生中期には奄美系，弥生後期には大隅諸島系であろうと思われた。

貝塚時代後２期のうち平安時代には，土師器甕，須恵器壺のほか，トカラ列島初の出土となる中国越州窯系青磁坏がセットで確認された。ただし，これらは量的に多いものではなく，原初的な祭祀遺跡の可能性も否定できない。

中世の遺物としては，宋代の白磁碗・壺，褐釉陶器壷のほか，越州窯系青磁水注が得られた。この越州窯系青磁水注は，南西諸島ではかなり珍しいものであり，九州以南の消費地動向からは大宰府―長崎―中之島―喜界島を結ぶ交易ラインがあったことが明らかとなった。

調査中は 4㎜ メッシュで全土壌を篩掛けしたが，貝類・魚類・陸上動物などの動物遺体はほ

とんど得られなかった。土壌には炭化物が多量に含まれていたため，土壌をコラム・サンプリングした。ウォーター・フローテーションによって植物遺体が含まれていないかを確認する予定である。

（３）トカラ列島宝島大池遺跡（A・B 地点）の発掘調査を実施した。島の北東部に位置する巨大砂丘に位置する。A 地点南東部には大池と呼ばれる水源地，B 地点南西部には小池と呼ばれる水源地が存在する。

B 地点ではかつて遺物が採集されたとされる微高地にトンレチを設定したが，遺構・遺物は検出されなかった。また，現在でも露出した弥生時代の所産であるとされる石棺墓の底石が残っている。この底石の一部を取り除き，その下部を掘削調査した。その結果，南西諸島にしばしばみられる特有の複層構造ではなく，単層構造であることが判明した。

A 地点は３箇所を掘削調査したが，東側地点（A3Tr）では，配石の巡る炉跡２基を検出した。土器は貝塚時代前２期後半（縄文時代前期末葉～中期前葉）の室川下層式土器のみであり（表面採集では春日式土器らしき土器片も得られた），島外産のチャート剥片石器のほか，剥片が多量に出土した。オオツタノハ貝輪や貝小玉も得られた。動物遺体はサンゴ礁域の貝類・魚類が多量に出土し，ウミガメやイノシシも出土した。明らかな生活層であった。西側地点（A1/A2Tr）に行くにつれ遺物は少なくなったが，A2Tr においては，土器の出土は全くないものの，頭部を含むウミガメのまとまった廃棄状況，イノシシ椎骨の関節した状況が検出された。この地点では南西諸島でも初の出土となる，背面に２孔を穿ち，腹縁部を鋸歯状に剥離加工したマスオガイ類（この貝種もまた新日本記録種の可能性があるとされる）の有孔貝刃が同地点において出土したことなどから，解体場所として想定可能かもしれない。

同遺跡の調査では，貝塚時代前２期後半（縄文時代前期末葉～中期前葉）におけるトカラ列島南部におけるサンゴ礁環境の成立が確認でき，主にそれに依存した食性が明らかとなり，大型動物の解体あるいは廃棄場所らしき地点を把握することができた。また，現存しないマスオガイ類，イノシシのほか，島外産のチャートなども確認され，当該期の人間活動の活発さを明確にした。土壌には炭化物が多量に含まれていたため，土壌をコラム・サンプリングした。ウォーター・フローテーションによって植物遺体が含まれていないかを確認する予定である。

（４）本研究は先史～原史時代の研究を主としているが，その調査過程で明らかとなった歴史時代の研究も実施した。トカラ列島平島では，これまでにも同一文様をもつ清朝磁器が海浜部や集落部から得られていた。その理由としては漂着船や投げ荷である可能性が指摘されていた。この実態を検討するため，トカラ 10 島の踏査を実施した。その結果，平島で多く表面採集できる清朝磁器に対応するのは，仙芝祝寿文碗・皿，菊唐草文碗，双喜文碗などがあり，これらは器形によって，腰部屈曲の碗 A，丸みを帯びる碗 B に分けられるが，双喜文碗のみは碗 B しかないことが分かった。これらのほかにも数は少ないが，いわゆる印青花，小杯，蓮華なども確認できた。これらを島ごとに採集数量を検討したところ，平島の集落部・海浜部で最も多く得られ，周辺の島には少ないことが分かった。そして当該清朝磁器の出土・採集は，東南アジアなど国外に多いいっぽうで，日本国内では極めて珍しく，ほぼトカラ列島に主体的に分布する特性があることが判明した。そこで，平島の伝承を探索したところ，明治 28 年に無人の中国漂着船が平島付近に漂着し，積載されていた陶磁器が島民に分配されたという記録を確認した。また，1985（明治 28）年にトカラ列島ほかの行政調査を実施した大島島司・笹森儀助による『拾島状況録』のなかに，明治 27 年，平島において中国陶磁器を搭載した国籍不明の無人帆船が漂着し，これを引き揚げたがその途中で沈没したこと，その品種や数量は別に「届出」がなされていることなどが記されていた。その後，国立公文書館アジア歴史資料センター公開資料内に，明治 27 年８月 30 日平島における陶磁器類など多数を搭載した無人漂着船の記録を発見した。積載品はリスト化されており，これが笹森のいう「届出」であった可能性が高い。積載品は中国製のものが多く，衣服類・寝具類・物入れ・食器類・笠類・食料・武器・金銭・地図・その他・書類などに分類できるが，なかでも 1930 束（１束：５個あるいは 10 個一単位）の「陶器茶碗類」と，328 個の「手篭入り陶器茶碗類」などが「平島保管分」として島に残されたと記録されていた。平島における聞き取り調査を実施したところ，海岸部で多量に出土する地点があったことや，近年まで使用していたことを確認した。これらのことから，平島で大量に得られながらも，国内でほとんど流通していない当該清朝磁器のセットについては，明治 27 年８月 30 日の中国無人漂着船に由来している可能性が高く，漂着年代も明確なことから，これらの清朝磁器の流通時期の定点を確認することができた。さらにこれらは，日常的な交流圏を通して主にトカラ列島内でローカルな流通をしていたことも明らかとなった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　９件）

① 新里貴之，琉球列島先史時代の重層石棺墓，東南アジア考古学会 2018 年度大会，2018，査読無，1-8

② 新里貴之，先史琉球列島の葬墓制，平成 30 年度第 2 回（通算第 9 回）葬墓制からみた琉球史研究会資料集，2018，査読無，5-8

③ 新里貴之・黒住耐二・樋泉岳二，トカラ列島宝島大池遺跡，平成 30 年度鹿児島県考古学会総会研究発表会要旨，2018，査読無，31-32
④ 新里貴之，トカラ中之島地主神社敷地内の発掘調査速報，南島考古だより，106，査読無，2017，2-3
⑤ 新里貴之，トカラ列島の弥生時代と平安時代：中之島地主神社敷地内発掘調査成果から，日本考古学協会第 83 回総会研究発表要旨，査読無，2017，178-179
⑥ 新里貴之，トカラ列島の先史時代遺物，廣友会誌：高宮廣衛先生追悼記念号，9，査読無，2016，19-28
⑦ 新里貴之，ピーピーどんぶり考，鹿児島考古，46，査読有，2016，77-92
⑧ 新里貴之，トカラ列島平島の清朝磁器と明治 27 年漂着の無人船，日本考古学協会第 82 回総会研究発表要旨，査読無，2016，76-77
⑨ 新里貴之，大隅諸島・トカラ列島・奄美諸島の弥生土器，弥生系土器について，鹿児島考古，45，査読無，2015，57-66

〔学会発表〕（計　15 件）
① 新里貴之，トカラ列島 中之島地主神社 2017 年改修時廃棄資料，鹿児島大学トカラ列島および甑島列島総合調査報告会，2019，鹿児島
② 新里貴之，琉球列島先史時代の重層石棺墓について，東南アジア考古学会 2018 年度大会，2018，沖縄
③ 新里貴之，先史琉球列島の葬墓制，平成 30 年度第 2 回（通算第 9 回）葬墓制からみた琉球史研究会，2018，沖縄
④ 新里貴之，ヒスイの道から貝の道へ，縄文と沖縄：火焔型土器のシンボリズムとヒスイの道シンポジウム，2018，沖縄
⑤ 新里貴之・黒住耐二・樋泉岳二，トカラ列島宝島大池遺跡，平成 30 年度鹿児島県考古学会研究発表会，2018，鹿児島
⑥ 新里貴之，「テーラのピーピーどんぶり」とは何だったのか，第 54 回トカラ塾ライブトーク，2018，東京
⑦ 新里貴之，奄美をフィールドとした人類学者：三宅宗悦，面縄貝塚国史跡シンポジウム：面縄貝塚から日本考古学のあゆみを学ぶ，2017，鹿児島（徳之島）
⑧ 新里貴之，奄美・沖縄における貝塚時代後２期土器研究の課題：フェンサ城貝塚調査成果から，平成 29 年度奄美考古学会沖縄大会，2017，沖縄
⑨ 新里貴之，トカラ列島の弥生時代と平安時代：中之島地主神社敷地内発掘調査成果から，日本考古学協会第 83 回総会，2017，東京
⑩ 新里貴之，考古学からみた琉球列島へのヒト・モノの動き，平成 28 年度琉球大学学長リーダーシッププロジェクト「琉球諸語における「動的」言語系統樹システムの構築を目指して」研究シンポジウム：言語と文化と遺伝子からみた琉球列島への人の移動，2017，沖縄
⑪ 新里貴之，トカラ列島・平島の中国清朝青花の由来，公益財団法人古都飛鳥保存財団設立 45 周年記念：沖縄・奄美群島にみる黒潮文化を訪ねて：黒潮セミナー，2016，鹿児島（奄美大島）
⑫ Takayuki SHINZATO，The Shell Exchange Systems of the Late Shell midden Period in the Ryukyus，世界考古学会議第 8 回京都大会，2016，京都
⑬ 新里貴之，トカラ列島平島の清朝磁器と明治 27 年漂着の無人船，日本考古学協会第 82 回

総会，2016，東京

⑭ 新里貴之，横当島 ：よはてん，よあて，ゆわてー，よーてー，よこあて，おがみ，クレオパトラ・アイランド，トカラ塾第 43 回南島学らいぶとーく，2016，東京

⑮ 新里貴之，トカラ列島の先史文化はどこまで遡り得るか，鹿児島大学平成 27 年度重点領域研究「島嶼」三島とトカラ列島及びその周辺海域総合学術調査，2016，鹿児島

〔図書〕（計　9 件）

① 新里貴之　他，南島出土ヒスイ製品の特質，山崎真治（編），縄文と沖縄：火焔型土器のシンボリズムとヒスイの道，沖縄県立博物館・美術館，2018，103（88-95）

② 伊藤慎二，黒住耐二，新里貴之，山野ケン陽次郎　他，墓と葬制，沖縄考古学会（編），南島考古学入門，ボーダーインク社，2018，262（96-100）

③ 高宮広土，新里貴之，黒住耐二，樋泉岳二，沖縄フェンサ城貝塚の研究，鹿児島大学国際島嶼教育研究センター，2018，160

④ 高宮広土, 新里貴之, 黒住耐二, 樋泉岳二　他, 貝塚時代後 1 期の土器文化, 高宮広土（編），奄美・沖縄諸島先史学の最前線，南方新社，2018，190（20-44）

⑤ 新里貴之　他, 先史･古代, 宇検村誌自然･通史編, 宇検村誌編纂委員会, 2017, 1059（145-194）

⑥ Takayuki Shinzato *et al*. Archaeological Survey in Uke-shima and Yoro-shima Islands, The Amami Islands, kagoshima University Research Center for the Pacific Islands, 2016 , 151（129-141）

⑦ 新里貴之　他，南西諸島の土器と成川式土器，橋本達也（編），成川式土器ってなんだ？；鹿大キャンパスの遺跡から出土する土器，鹿児島大学総合研究博物館，2015，102（31-38）

⑧ 新里貴之　他，新里村式土器，ビロースク式土器，中森式土器，石垣市史各論編考古，石垣市教育委員会，2015，387（237-246）

⑨ 新里貴之　他，沖縄・奄美，佐藤由紀男（編），考古調査ハンドブック（12）弥生土器，ニューサイエンス社，2015，477（96-119）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況（計　0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織

(1)研究分担者
なし

(2)研究協力者
研究協力者氏名：黒住耐二
ローマ字氏名：KUROZUMI Taiji
研究協力者氏名：鐘ヶ江賢二
ローマ字氏名：KANEGAE Kenji
研究協力者氏名：山野ケン陽次郎
ローマ字氏名：YAMANO Kenyojiro
研究協力者氏名：樋泉岳二
ローマ字氏名：TOIZUMI Takeji
研究協力者氏名：三辻利一
ローマ字氏名：MITSUJI Toshikazu
研究協力者氏名：伊藤慎二
ローマ字氏名：ITO Shinji

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。